

カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴木 忠 士

はじめに

梗 概

- I 親和的世界とその住人
- II 親和的世界から敵対的世界へ (以上, 愛知大学『文学論叢』第59号)
- III 敵対的世界とその住人 (名古屋人文科学研究会『年報』第4号)
- IV 親和的世界から自然的世界へ (同上誌, 第5号)
- V 自然的世界
予備的考察
 - 1 生と死の弁証法
 - A. 生肯定的自然
 - B. 生否定的自然
 - a. 感 覚 (以上, 本誌)
 - b. 性 愛
 - c. 睡 眠
 - d. 活 動
 - e. 価 値
 - C. 生と死の統合
 - 2 死の願望と死の不安
 - 3 躁 と 鬱
 - 4 父親イメージと母親イメージ
 - 5 同性愛的感情と男性的抗議

V 自然的世界

予備的考察

人間は「身体を途方もなく超えてゆく」精神をもつことによって他の生物とは区別される、とカミュは『シーシュポスの神話』(1942年刊行、以下『神話』と略記)のなかで言っている。⁽¹⁾動物や植物は「世界の一部」であり、「世界そのものである。⁽²⁾(傍点は原著者)」しかし人間は、自然からみれば元来任意の一生命体に過ぎないものを自己として対象化し、この自己とともに諸々の存在者一切を含む全体を世界として対象化する。人間はその「意識のすべてによって」、「この世界に対立しているのである。⁽³⁾」こうして精神は自然の内(自己)と外(環境世界)の分化の、さらには乖離の意識として、世界に対立する自己意識として立ち現われるのであるが、また同時に、自ら損った世界の「統一へ」の「郷愁」に駆られる。そこから「全体の一体性を断言し、その断定そのものによって精神自体が全体とはちがう存在であることを証明」してしまうという精神の「滑稽な矛盾」が生ずることになる。⁽⁴⁾

だが、追い求めるからこそ得られることのないというこの「統一」は、既にして与えられているのであり、見出されなければならない統一とは、再び見出されるべきものなのではないだろうか。というのも、人間と世界との初発の関係は対立ではなく「相即」⁽⁵⁾の関係であるからだ。人間は身体という内なる自然によって外なる自然「の一部」である。人間は自然現象のもつ周期性を、例えば睡眠・覚醒のリズムとして、食欲や性欲の規則性として生きる。⁽⁶⁾「人間はそれ自身こういったリズムをもった存在なのである。」⁽⁷⁾

他方、精神は身体に対立して現われるに先立って、まず「気」として現われる。気とは「世界の根源であると同時に身体的生命の根源」でもあり、さらに

気は「恒常不変」の存在ではなく「刻々にその様相を変える活動的なもの」であり、「自然界における気の変化が『気候』として、あるいは『気象』として現われるのに呼応して、人間における気の個人差は『気象』、『気性』、『気質』などとして現われてくる。そして、このようにして各個人が宇宙的、遍在的な気を分有し、各自の分けまえとして持っている気の個別の様相は、『気分』あるいは『気持』の言葉で表わされることになる。(傍点は原著者)⁽⁸⁾ こうして、「自然自体が気分をおびて現われて」くるのであり、「人間と自然とは互いに気分づけあっている」と言えるのである。⁽⁹⁾ 相即的に立ち現われる人間と自然の全体が世界(コスモス)と呼ばれるのである。⁽¹⁰⁾ 拙論に謂う自然的世界とは、自然を中心として見た世界(コスモス)のことである。

自然のすべての運動は渾然として一体をなしているが、生体の行動の形式が二肢択一を原型としているとすると、これに対応して自然の運動も生体にとっては相反する二様の作用として捉えられよう。生体にとって適度な範囲の刺激をもたらす環境的自然はその生体の維持に安定をもたらすものであり、過剰な刺激をもたらす環境的自然は生体に活動の縮小停滞を、ひいては死をもたらすものである。

人間は自然のこの二つの作用を自己の内と外とに「共通の場所」としての「⁽¹¹⁾気の場所」において捉える。生命的感情が充溢し、心と世界が「相即」の関係にあるときには、自然的世界は生を肯定し高揚させるものとして表象されようし、逆に生命的感情の活動が低下し心が世界に対して閉じられているときには、自然的世界は生に敵対し否定しざるものとして表象されよう。

勿論ふだん人はこれほど極端に対照的な相貌をもつヤヌスとして自然を表象してはいない。自然のこの極端な「⁽¹²⁾感情性有情化」あるいは「宇宙人間視作用」(anthropomorphisme)⁽¹³⁾は格別の心身状態即ち気分⁽¹⁴⁾に因るものであろうし、また性格としての「気性」に、さらには「気質」に因ると言わなければなるまい。

『異邦人』(1942年刊行)の主人公ムルソオは自ら、「肉体的要求のためにしばしば感情をみだされる性質である」と言っている。⁽¹⁴⁾これはまず、彼が内なる自然

の変化に敏感であり、ときに過敏とさえ言える場合もあるということを意味しているが、それにとどまらない。内なる自然としての「肉体」の「要求」は外なる自然の様相と相関的なのであるから、彼は内と外の自然の変化に同時に敏感なのであり、自然的世界の「⁽¹⁵⁾気の動静」と彼の「⁽¹⁵⁾気の動静」は相関的なのである。少なくともそれが読後に残る印象である。

『異邦人』の主人公は、怨恨と呪縛からなる、不明瞭な馴れ合い関係を世界との間に結んでいる」というロブ・グリエの指摘は、ムルソオと世界との関係を「馴れ合い」(connivence)として否定的にしか扱えていない点で一面的であると言わざるをえないが、ともかく世界とムルソオとの間の濃密な情緒的關係の示唆として評価しうるものである。拙論も『異邦人』に類出する宇宙人間視的(anthropomorphique)な「古典的隱喩」は「まさにこの書を説明するものである」と考えるが、しかしそれはロブ・グリエのように語りの文体的特徴を作者の意図に還元するためではない。⁽¹⁶⁾拙論の立場は、まず以て『異邦人』を語り手ムルソオの語りと考えるところにある。語りの文体、つまり語りの方法と語られている事柄とは、ある程度において語り手の意図と意志に基づく。しかし、それとともに、少なくとも同程度には、語り手の「気分」と「気性」、さらには「気質」に係わることであると考えるのである。

まず、ムルソオの気分の変化と相即的に自然的世界の有情化がどのように変様しているか記述することから始めよう。語り手の自然的世界の把握は宇宙人間視的であるという読後の直観的判断に基づいて、記述の便宜を計って、自然的世界とムルソオとが親和的である場合の自然を生肯定的自然と、それに対応するムルソオの気分を明るい気分と呼び、その逆の場合は生否定的自然と暗い気分として、この二対のカテゴリーのもとに自然的世界とムルソオの気分の相関関係を記述する。

もし自然的世界のこの二つの相貌がムルソオの語りにおいて相容れない著しい対照をなしているとすれば、自然に対するムルソオの気分が相反感情併存的(ambivalent)であるとすれば、それはムルソオの生への執着の強さとともに死

の不安の強さを物語るものであろう。実際『異邦人』を全体として眺めたとき、そこに生と死の二つのモチーフが拮抗していることに気付かざるをえない。一方で性愛や自然との交感の描写によって生の高揚が謳われているとともに、他方で死がその暗い影を作品全体に色濃くおとしてもある。物語は主人公が母の死の知らせを受けるところから語り出され、主人公の確実で間近な死を告げることによって終る。ムルソオは人を殺し、母を「心の中で殺した⁽¹⁷⁾」と言われ、父親殺しの罪も被せられる。「いくつかの命が消えつつある養老院⁽¹⁸⁾」があり、死病に冒された看護婦がいる。生と死の現象がこのように対立しつつ併存しているとともに、物語は正確に言えば語り手による死の受容と生きることへの意志の表明によって、つまり生と死との矛盾の止揚によって終るのである。即ち、生と死の弁証法こそこの作品を貫徹する主題なのである。

「ロマン派の偉大なヴィジョンの一つは、人類の歴史が、人間自身と自然との原初の未分化の統合の状態から出発し、自然からの分化と対立(疎外)の間で人間の力が発展する中間期を経て、最終的に、調和またはより高い次元における統合に戻るという構成である⁽¹⁹⁾」とするならば、『異邦人』もまたこのロマン派的なヴィジョンに従って構成されていることは、少なくとも物語構造の明示的な層に視点を置く限り、明らかなことであると思われる。即ちこの物語は、「自由な人間」ムルソオにおける生と死の両モチーフの混在、次いで「囚人⁽²⁰⁾」ムルソオにおける生と死の葛藤、そして最後に「解放⁽²¹⁾」されたムルソオにおける生と死の調和的統合という三段階の構成をとっていると見えるのである。

だが、もしこの究極の「調和」に深い亀裂が隠されているとすれば、「統合」がシーシュポスの力業がもたらした「一時の平静⁽²²⁾」に過ぎない不安定なものであるとすれば、語り手の意図や意志を超えたところにその原因を求めなければならなくなる。それは語り手の「気性」、さらには「気質」を問うことであり、語り手の意識の過程からは排除されながら、それ故にこそ却って意識を撃射しそこに分裂をもたらすに至る無意識の過程を問うことである。

ここで一虚構作品の語り手の無意識の過程を問うという問題設定自体が成り

立ちうることなのかどうか、という疑問が当然出てこよう。「人間的な直接的接
触」⁽²³⁾のなかでの観察もできなければ、自由連想法を虚構の人物に施すこともでき
ない。だが、例えば世に「シュレーバー症例」の名で知られるフロイトの論
考を範例とすることはできないだろうか。フロイトはこの論文においては、原則として患者シュレーバーの著わした『ある神経病患者の回想録』のみを資料として、患者の病歴の解釈を試みているのである。フロイトは「直接的接触」ぬきの方法を使ったことを二つの理由で正当化している。一つには、「他の神経症患者が秘密として隠しているもの（無意識）を、パラノイア患者は歪曲された形ではあるが洩すことがある」ということであり、いま一つには、「彼等は自分の話したいことだけしか話さない」のでどのみち通常の分析療法は効を奏しないということである。⁽²⁵⁾虚構の物語の語り手とは、結局のところパラノイア患者とこの二つの「特異性」⁽²⁶⁾を共有している者のことではないだろうか。

拙論の問題設定を正当化するもっと本質的な理由を述べよう。『異邦人』の語りの構造そのものが、語られている事柄のうちに語られていない事柄を見出さざるをえなくさせるのである。第一に、語り手は結局「自分の話したいことだけしか話」していないのであるし、しかもそこに様々な「歪曲」を我知らず凝らしてしまっていると想定することは不条理とは思われない。第二に、語り手も一登場人物であるから、その語りは自分と他の登場人物とによって構成される状況の制約を受け、語られるはずのものが語られずに終るということもあるのである。

ムルソオは物語の終局部において、「僕は正しかったし、いまも正しく、いつでも正しいのだ」⁽²⁷⁾と、「自分が幸福であったし、今でもそうだと感じた」⁽²⁸⁾と言っているが、こうした「確信」⁽²⁹⁾が単なる「主張」⁽³⁰⁾ではなく、真実を含むものであると読者に納得させるに足る十分な資料を彼は提供しているであろうか。

第一部において「まずそれ自体として提示された同じ諸事件が、つぎには」^{アレザンデ}第二部において「裁判官たちによってそれが意味するものとして再提示される」^{ル＝アレザンデ}⁽³¹⁾と言われている。だがこうした素朴な印象は事実によってすぐに否定され

る。というのも、第二部の法廷の場面で、本来第一部において「提示」されるべきものが初めて語り手自身や他の登場人物によって「提示」されるということがあるからである。例えば養老院の院長は、ムルソオが「ただの一度も泣かなかつたこと、葬式のあと、墓の傍で瞑想にふけらず、すぐに帰ってしまったことなど」を証言するが、読者には初耳のことである。埋葬時の出来事は、「もう何も思い出せない」と言って語り手が大方端折ってしまったからである。⁽³²⁾また、被告人ムルソオは証人セレストの着ている「新しい服」に注目して、「その服は彼が、僕と一緒に、日曜日にときどき競馬に行くためにきたものであった」と述べているが、⁽³⁴⁾このような本来第一部に属すべき挿話の紹介によって初めて読者はセレストとムルソオとの間の交友関係の一端を具体的に思い描きうる資料を得たのである。さらに、ムルソオが「正しかった」し「幸福だった」と判定するために必要な彼の生育史をはじめとする生活歴については、読者は直接的には殆んど何も知り得ず、「再提示」が前提とする「提示」そのものが省かれているのである。

逆に、第一部において既に「再提示」が行なわれている場合もある。例えば、通夜の場面で、「僕は彼ら〔老人達〕の真ん中に横たわっているこの死人が、彼らの眼にはなんの意味も持たないのだという印象さえうけた。しかしいまではそれは誤った印象だったと思う⁽³⁵⁾ (傍点は鈴木、以下同じ)」と語り手は言っている。まず最初の印象を「提示」した後に、「再提示」においてその印象に基づく判断の修正を行なっているのである。だから極端に言えば、語り手は「まさに、『描写する』と想着しているときでも、事実⁽³⁶⁾にたいする『彼の』解釈を示すこと以外」のことはしていないということになる。結局語られていることは、語り手の取捨選択の結果なのであって、「提示」が「直接的なものの領域なのであり、読者にとっては、疑いもなく、この直接的なものがまた真正なものである⁽³⁷⁾」という読者の素朴な印象は放棄されなければならない。

語り⁽³⁷⁾に内在するこの取捨選択の機能を掌るフィルターの在処は語り手の意企の水準にのみ索められるべきではない。むしろ、意識と無意識のはざまに置か

れていると言ふべきである。語り手は我知らず隠すために語り、そのように語ることによって隠されているものの在り所を暗示してしまふ。また、沈黙することによって却って何事かを勇弁に語っている場合もありうる。作者カミュも『神話』で言っている、「ひとは、口に出して語ることによってよりも、口に出さずにおくことによって、いっそうそのひと自体である」⁽³⁸⁾と。隠されているものとは、語り手自らはその存在すら気付かない秘められた情念のことであり、その在り所は語り手の無意識である。

実際、語り手は様々な方途によって自らの無意識への戸口を読者に塞いでいる。この事実が一層語り手の無意識を問題視させるのである。

夢は無意識への王道であると言われているが、『異邦人』全体にわたって夢への言及はまったくない。「自由な人間」ムルソオの眠りは「いつも軽く夢のない眠り」⁽³⁹⁾であったと言われ、「囚人」ムルソオは「毎日十六乃至十八時間眠」⁽⁴⁰⁾るまでになりながら夢を見た形跡がない。また、前章で述べたように、囚人ムルソオにとって「回想」⁽⁴¹⁾は「時を殺す〔ひまつぶしをする〕」⁽⁴²⁾に最も有効な手段であると言われているが、その内容は著しく限定されている。無意志的記憶さえもが、「もっとも貧弱だがもっとも長続きする遊び」の「思い出」⁽⁴³⁾という、ムルソオの自己像にとって無害なものしかもたらさない。さらに、犯行についてムルソオ自身は、「殺す意図」はなく「太陽のせいだ」と主張しているが、但し「自分の滑稽さを意識しながら」⁽⁴⁴⁾だと付言していることから、「ほかにまだある」⁽⁴⁵⁾と自ら感じとっていると推測される。しかし、当の犯行の場面の叙述においては、殺人の「動機」⁽⁴⁶⁾となった情念の動きについては、少なくとも明示的には、言及されていない⁽⁴⁷⁾のである。

夢や無意志的記憶や主人公の内面的世界を叙述から排除すること、あるいは少なくともその叙述に著しい限定を課すこと、これはなお語り手の方針によるものであり、語り手の意識的選択の枠内のことであると言えないこともない。

だが、例えば「(いまだに) 何故だか分からないが」(je ne sais pas [encore] pourquoi)⁽⁴⁸⁾という表現を語り手は多用しているが、これは確かにムルソオが「自

分に問いかける習慣を幾分失ってしまった⁽⁴⁹⁾」ことの傍証ともなる口癖であるが、と同時に、彼自らはそれと気付かぬうちに困難な問いの前をごく自然にすり抜けることを可能にしているのである。この問いに直面しそれを窮めることを彼の心中の何かが妨げているのである。また例えば、ムルソオは返答せず無言のままにすることがよくあるが、これも一方においては単に彼が「口数の少ない」こと、「いつも大して言いたいことはない⁽⁵⁰⁾」ことを例示するものであるが、他方において重要な問いを前にしても沈黙を守ることが彼自身と読者に看過されうるための伏線ともなっているのである。何故「間を置いて」撃ったのかという予審判事の問いに対して、無言でいた、と三度続けてムルソオは言っている⁽⁵¹⁾。間を置いて撃った事実は「それほど重要性を持たない」とムルソオ自身は主張しているけれども⁽⁵²⁾、その根拠を明らかにしていない。むしろ、彼は脳裡に犯行現場を再現し「赤い海岸を見、額に太陽の灼けつづのを感じた⁽⁵³⁾」のであるが、それ以上のものが浮かんでこなかったので「答えようがなかった⁽⁵⁴⁾」のが真相ではないだろうか。ここに抑圧の機制を、無意識的な取捨選択をみることは不当とは思われない。

語り手の「提示」が結局のところ「再提示」であることによって、その「真正」性を疑われうるとすれば、狭義の「再提示」それ自体もその「真正」性を疑われざるをえないところがある。例えば、法廷でムルソオは「あの頃、僕を待っていたのは、いつも軽く夢のない眠りだった⁽⁵⁵⁾」と独語しているが、「夢のない眠り」というものがそもそも虚構であることは措くとしても、犯行当日の朝の目覚めが「僕は容易に眼がさめず〔……〕僕は身体が空虚になったようで、少し頭が痛かった。〔……〕マリーは僕をからかって、僕が『葬式のような顔』をしているといった⁽⁵⁶⁾」という状態のものであったとすれば、いつも軽い眠りであったとは言えないだろうから、語り手の「再提示」は歪曲を含んでいると判断せざるをえない。また、「僕は不意打ちを食うのは、いつも好まなかった。なにかが僕の身におこるとき、その用意をしていたかった⁽⁵⁷⁾」と語り手は言っているが、「提示」におけるムルソオは不「用意」にも「偶然⁽⁵⁸⁾」に自ら身をまかせて、

最大の「不意打ち」である「防ぎよう」のない「不運」に見舞われ、殺人を犯すに至った筈である。確かに「不意打ち」に身構える姿勢も見うけられるが、それとともに無頓着なところもあるとするのが「真正」な「再提示」というものであろう。さらに、「僕は正しかった」とムルソオは主張しているが、ひとり人間を自らの手で屠った事実はどうするのだろうか。これらの「真正」さを疑われる「再提示」は、観点をずらせば、新たな「提示」と見做しうる。狭義の「提示」を歪曲する「再提示」は、その歪曲という事実自体によって、そのテキストに潜む無意識の情念が問われねばならないのである。

判決後の独房におけるムルソオの内省と司祭との会見の次第が叙述の大半を占めている第二部最終章には、それまでのムルソオの過去の「再提示」とともに新たな「提示」も含まれている。この「提示」に対しても、全面的に「真正」である、という判断は下しえないだろう。というのも、回想されるムルソオの言っていること自体のうちに幾つかの矛盾が認められるからである。例えば、「僕は真の想像力を一度ももったことがない」〔再提示〕とムルソオは断言しているが、それから先で、「二十年後にやはりそこ〔死〕へ行かなければならなくなるとき、どんなことを僕が考えるか想像して〔……〕」〔提示〕と(61)「二十年後」の自分が「考える」ことを「想像」するには、希有な「想像力」が必要に思われる。彼はまた或る所で、「僕はたぶん何が本当に自分に興味があるかについては確信がもてないかもしれない」〔提示〕と(62)言いつつ、別の所では、「すべてに確信を持っている」〔再提示〕と(63)明言している。人間は「すべて死刑囚なのだ」という司祭の意見に対し、「それは同じことではない」〔提示〕とムルソオは(64)言い返すが、その先の所では、「他の人々もまた、いつか死刑を宣告されるだろう」〔提示〕と(65)言っている。さらに、司祭の「確信はどれをとっても女の髪ひと筋の値打ちもない」〔提示〕と(66)言うが、そのすぐ後で、「ある暗い息吹き〔死〕が、〔……〕すべて同等の価値にしてしまった」〔再提示〕と前言に反するようなことを(67)言い、その舌の根の乾かぬうちに、「彼〔レエモン〕よりすぐれた〔価値のある〕人物であるセレスト」〔再提示〕などと(68)言ってしまった。これらの矛盾

は、些細なものも重要なものも、単なる言い間違いであるとか、修辞の問題であるとか、思考力の不足からくる支離滅裂であるとか言ってしまうものとは思われない。というのも、ムルソオは検事によって「この男は頭がいい」、「言葉の価値を心得ています」と評されているからである。そして、これら「提示」と「提示」、「提示と再提示」、「再提示」と「再提示」それぞれの間における微妙なずれや食い違いは、語り手の意識過程と無意識過程のずれや乖離を表わしているのではないか、という問いが少なくとも立てられるであろう。

ここで当然ひとつの危惧が湧いてくる。こうした方法は結局のところ検事をはじめとするムルソオを裁く者達が採った方法とどこが違うのかと。検事もまた「犯罪的魂の心理」⁽⁷⁰⁾について語っている。ただ、拙論の方法が検事のそれと異なるところは、「事実の目を射る明白さ」⁽⁷¹⁾に欺かれることなく、また「犯罪的」⁽⁷²⁾という予断を排して「殺人を犯すにいたるまでの」ムルソオの心理の過程を明るみに出そうとする点にあるのである。検事は「発作的な行為」⁽⁷³⁾としての犯行と「頭がいい」ということは並び立たないとし、そこから「充分自分の所業を意識しながら」⁽⁷⁴⁾ムルソオは犯行に及んだのであると結論するのであるが、拙論はこの矛盾する二つの要素が一個の人格のうちで併存しうると考えるのである。

拙論の方法と検事達の方法との違いをまた次のように説明することもできよう。予審判事・検事・司祭とムルソオとの関係は、「分析医の自我」と「患者の弱化した自我」との間の「自我の同盟(治療契約)」を基盤として成立する「分析状況」に譬えることができる。「分析状況」では、患者の自我は「完全な誠実さ」を「つまり分析医の要求に従って自らの自己観察にあらわれる全ての材料を提供し、それを、分析医に操作させる契約を結ぶ。他方、分析医は、患者の「自我に厳格な分別ある態度を守ることを保証し、無意識に支配された患者の材料の解釈に」自分の「経験を役立てる。分析医の「知識は患者の無知を補い、精神生活の失われた領域に対する患者の自我の支配権を回復させる。」⁽⁷⁵⁾「分別ある態度」とは、一つには、分析医と患者との関係が「再教育」として

も、医者は「他人に対して教師・模範・理想」となってはならず、「患者の個性を尊重しなければならぬ」ということであり、二つには、患者と分析医との間の「現実的な性的関係」を拒否することである。⁽⁷⁶⁾また、分析医は「世俗的な懺悔聴問僧の立場を目指しているような印象を与える」が、その相違は大きく、患者が「知っていて、たゞ他人にたいしてだけ隠している」ことのみならず、患者自身が「知らないことを物語らせようとする」のである。従って患者は、懺悔の対象となる事柄のみならず、「一切のこと」、「不愉快」なこと、「つまらない」こと、「無意味な」ことの一切を頭に浮かぶままに分析医に話す。こうして医者は患者の「抑圧されている無意識を推定」しうるに至るのである。⁽⁷⁷⁾最後に、分析の結論としての「構成」あるいは「決定的な総合」の時期には慎重を要するとされている。患者の側の準備がととのう以前に行なうと、「効果」がまったくないか、「激しい抵抗」を呼び起こすが、「構成が、今迄忘れられていた細部の一つ一つとぴったり合致すればするほど、患者の納得は容易になる。⁽⁷⁸⁾

ムルソオは予審判事に「頑なな魂」⁽⁷⁹⁾と、検事には「〔心の中に〕何も見つからなかった」、「魂など全くもっていないのだ」⁽⁸⁰⁾と、司祭には「心が盲いている」⁽⁸¹⁾と言われている。つまりムルソオの自我は負傷を帯びた、「弱化した自我」として扱われている。そして、何故問を置いて撃ったかと問う予審判事に示された反応に典型的に窺われるように、ムルソオは問われるままに「完全な誠実さ」を以て、「自己観察」に現われるままに材料を提供し、その「操作」即ち「再提示」〔解釈〕を相手に委ねているのである。とは言え、ムルソオを裁く者＝分析医、ムルソオ＝患者のアナロジーが有効なのはここまでである。というのも、問われる限りにおいて答えるという徹底した受身の態度の故に、ムルソオ〔患者〕は必ずしも自分にとって「不愉快な」、「つまらない」、「無意味な」ことを語るに至らない。他方、裁く者達〔分析医〕は、それぞれの仕方で「分別ある態度」という制約を踏み破ってしまう。予審判事は、ムルソオが何か「隠している」と見做して「何故」死体を撃ったかその理由を「言わなければならない」と問い詰め、神の許しをうけられるためには「悔悟によって子供のようになり、

心をからっぽにして、すべてを受け入れる用意がなければならない」と言って話題を懺悔の対象となるもの⁽⁸²⁾に限定するとともに、自己の「信念」⁽⁸³⁾(conviction)を押し付けて「教師・模範」であろうとする。さらに、ムルソオを「頑なな魂」とすることによって自己の挫折を糊塗し、「構成」そのものを諦めてしまうのである。検事は、ムルソオの犯罪の予謀性を「まず事実の持つまばゆいばかりの光のもとに、そして次にはこの凶悪な魂の心理が私にあたえてくれる、暗い照明のもとに」、⁽⁸⁴⁾「証明」しようとする。その「構成」は被告ムルソオによって「まことしやかな」⁽⁸⁵⁾(plausible)ものと評されるが、その目標とするところが「再教育」の裏返しの断罪であることによって「効果」を失う。また、ムルソオの「陳述」⁽⁸⁶⁾が殆んど求められていないことから明らかなように、検事は判断の資料を専ら客観的に確認しえた事実と証人の供述に限って、ムルソオ自身に「忘れられていた内的、外的な事件を自ら思い出」⁽⁸⁷⁾させるに至らない。司祭とはといえば、「人は確信していると思っていても、実際そうでないことがありうる」とか、ムルソオの言動は「絶望の余りではないか」と言い、⁽⁸⁸⁾「構成」を先取りすることによってムルソオの「抵抗」を喚び起こす。虚心に「自己観察」を勧めるかにみえて、その実ムルソオに懺悔させ、自己の「信念」に基づいてムルソオを教導することが狙いなのである。ムルソオの「個性」を無視して、「あなたのために祈ろう」⁽⁸⁹⁾とさえ言う。

結局ムルソオを裁く者達の関心の射程はムルソオの「魂」⁽⁹⁰⁾の意識的過程を超えないのであって、その目標はムルソオが「隠しているもの」を明らかにすること、懺悔させることに留まっている。しかも、自らの「信念」に拠る強引な「構成」を以てムルソオの「個性」を抹殺し、ムルソオに「とって代わり」、ムルソオを「ゼロにする」⁽⁹¹⁾ことを目差しているのである。問われるどころか、自らの「精神生活」そのものが抹消されかねない状況にあっては、ムルソオの無意識の「心は閉じられ」⁽⁹²⁾たままに終らざるをえないのである。

以上の次第で、語り手の「気性」(性格)や「気質」を問うことの意義とともに、語り手の無意識への問いの必然性が明らかになったことと思う。

まず、語り手の「気分」に立ち現われる自然的世界を生と死の二つの相貌の下に記述しよう。そして、この生と死の二つのモチーフの葛藤の背景をなしている無意識的過程の中から最初に死の願望とそれと表裏一体をなす死の不安を取り出そう。次いで、無意識の構造の言わば物質的構成要因としてムルソオの「気性」や「気質」を、躁と鬱の観点から捉えてみよう。さらに、幼少年期における心的外傷は個人の無意識の重要な構成要因であるが、これをムルソオの語られざる生育史に推定するために、彼のもつ父親イメージと母親イメージを考察してみよう。最後に、性愛におけるムルソオの行動様式を規定する根本的な要因を、彼の無意識に潜在する同性愛的感情とそれに対する男性的抗議の葛藤のうちにもとめてみよう。

これら様々な水準における問題設定とその考察はすべて、ムルソオが口にすることなく終り、あまりに深く抑圧されているので彼自らは自覚するに至らなかった唯ひとつの情念、「始源の情念」(sentiment initial)⁽⁹³⁾の確認へと収斂していくのである。

1 生と死の弁証法

『予備的考察』で述べたように、本節の叙述は、先ず記述を宗とし、その過程で記述内容を統括的に説明しうるような主導的モチーフの解明を試みていくという形態をとる。記述という方法からして以下の叙述は、煩瑣に互る惧れなしとしないが、ある程度網羅的且つ枚挙的にならざるをえない。幸いこの叙述方法は作者カミュ自身の思想によっても正当化されうると思われる。『神話』のなかでカミュは、「量という観念」によって「人間の経験のかなり大きな部分が説明できる〔……〕ひとりの人間の道徳、一連の価値のシステムは、その人間が集めることを許された経験の量と多様性によってしか意味をもたない」と言っている。⁽⁹⁴⁾ 拙論もまた、先ずムルソオの「経験の量と多様性」を収集記述し、そこからムルソオの「道徳、一連の価値のシステム」を再構成し、さらには、『予備

的考察』で拙論の課題として述べたように、ムルソオに「生れながらのものとして《あたえられている》もの」⁽⁹⁵⁾の解明に至ろうとするものである。しかも、カミュの言うように、「経験」とは、あるいは「生きるということ」とは「可能なかぎり多量に感じとる」⁽⁹⁶⁾ことであるとするならば、ムルソオの感覚と感受性のあり方の記述から、その「量と多様性」の記述から始められなければならないことになる。以下、自然的世界とムルソオの気分^{心・情}の相関関係の様々な様相を、感覚・活動・性愛・睡眠・世界・価値の六つの項目のもとに記述していく。

A. 生肯定的自然

a. 感 覚

精神はまず感覚を介して内なる自然としての身体に出会い、身体を介して外なる自然としての環境的世界に出会う。ムルソオはすべての感官を通じて内と外との自然がもたらす快刺激を享受しようとし、またそれを存分に享受しうるだけの豊かな感受性に恵まれてもいる。

味覚——ムルソオはとりわけて口唇領域の快感に敏感であるように思われる。セレストに「腹が減っている」と言って「大急ぎで食べ」⁽⁹⁷⁾、「彼女〔マリー〕が空腹を覚えなかったので、僕がほとんど全部食べた」⁽⁹⁸⁾り、マソンの妻に「うんとお腹がすいた」と言い「僕の分の魚は一気に食べてしまった」というように、概して彼は健啖である。また、「ミルク・コーヒーは大好き」⁽¹⁰⁰⁾で「またのんだが、とともうまかった」⁽¹⁰¹⁾、「パンはうまかった」⁽¹⁰²⁾と、さりげないが、味覚のもたらす快楽に敏感なところも窺わせるに足ることを言っている。独り身のせいで、「卵をいくつも焼いて、皿にうつさず食べ、パンを切らしていた」⁽¹⁰³⁾ので「なしですませた」⁽¹⁰⁴⁾り、「パンとマカロニを買い、自分で料理して、立ったままで食べた」⁽¹⁰⁴⁾り、なるべく「料理をしないですむ」⁽¹⁰⁵⁾ために、奢りの「陽詰」で夕食をすませたりするというように、ムルソオの食生活は粗っぽい。ここまでの引用文に現われている以外で彼の撰った、あるいは撰ったと推定される食物としては、「馬鈴薯」⁽¹⁰⁶⁾、「肉」⁽¹⁰⁷⁾、「肉と揚げたじゃがいも」⁽¹⁰⁸⁾、「サンドウィッチ」⁽¹⁰⁹⁾、「アイス・

クリーム⁽¹¹⁰⁾、嗜好品としては「コーヒー」⁽¹¹¹⁾、「コニャック」⁽¹¹²⁾、「ブドウ酒」⁽¹¹³⁾、「チョコレート」⁽¹¹⁴⁾、「煙草」⁽¹¹⁵⁾が挙げられる。ムルソオの献立をこのように一覽してみると、その内容は平凡であり、質素と言うべきかもしれないが、このことと味覚が繊細であることとは必ずしも矛盾しない。

嗜好品の中で「煙草」の現われる頻度が一頭地を抜いて高いことと、刑務所で「僕が一番まいったのは、たぶんこれ〔禁煙〕だった」と言っていること⁽¹¹⁶⁾から、ムルソオが愛煙家であることが推定されるが、それとともに、「酒をのみすぎたので少し眠った」⁽¹¹⁷⁾、「僕は一リットル近くの酒を呑んで、こめかみがひどく熱かった」⁽¹¹⁸⁾が「またすこし酒を呑んだ」⁽¹¹⁹⁾ので「立ちあがるのが苦痛だった」⁽¹²⁰⁾、「彼〔マソン〕は、たえず僕に〔酒を〕注いでくれた。コーヒーになると、僕は少し頭が重くなった」⁽¹²¹⁾と言っているように、酒を飲み過ぎる傾向も窺われ、いづれも口唇領域の快感への執着を示しているように思われる。

ムルソオの口唇の快刺激を受する能力の高さは、飲食物に対する反応においてのみ認められるわけではない。海の中で潮水を口に含んで遊んだとき、「口のなかが塩の苦味でやけるようになった。〔……〕彼女〔マリー〕は唇を僕のそれにあてた。彼女の舌は僕の唇をさわやかにした」⁽¹²²⁾と彼は言っている。

嗅覚——この感覚のもたらす快感にもムルソオは鈍感ではない。これを例示するものとして、「丘の上を越える風は塩の匂いをここまで運んできた。晴れた日が始まろうとしていた。〔……〕どんな楽しい散歩ができるだろうという気がした」⁽¹²³⁾、「僕は中庭の、すずかけの木の下で待った。さわやかな土の匂いを吸いこみ、もう睡気を感じなかった」⁽¹²⁴⁾、「長枕のなかにマリーの髪がのこしていった塩の香を求めて、七時まで眠った」といった箇所を挙げられよう。囚われの身となつては、こうした快感をもたらす刺激源そのものから隔絶されてしまうのであるが、それでもムルソオは失われた「欲び」の一つとしての「夏の様々な匂い」⁽¹²⁵⁾を思い出の中で楽しむのである。

触覚——この感覚が喚起する快的な印象に対してもムルソオは豊かな感受性をもっている。これを例示するものとして、「夏の夜が僕らの日焼けした身体の

上を流れるのは快⁽¹²⁶⁾かった」,「太陽のあたえる快感に没頭してしまった。砂が足の下であつくなりはじめた。僕は水にたいする欲望をまだこらえていた」⁽¹²⁷⁾,泳いだ後で「腹ばいになって、砂のなかに顔を入れ」ると「いい気持だ」⁽¹²⁸⁾った,「海岸に行つて、波打際におりて行きたいという欲望が僕を捕える。足の裏にひびく磯波,水にひたす身体,そこに覚える解放感などを想像すると,とつぜん,監獄の壁がいかに狭くなるしいかを感じてしまう」⁽¹²⁹⁾といった箇所を挙げる事ができよう。

聴覚——この感官においてもまたムルソオは快美な感覚をとらえるのに優れている。彼は看護婦代表の「顔に似合わぬ特色のある声,耳に快い,慄え声」⁽¹³⁰⁾に気付く。刑務所の接見所では,全体の「騒音」⁽¹³¹⁾のうちにも,音の高低の対照によって,ムルソオの聴覚はひとつの美的な形象を象ってみせる,「下方から発せられる彼ら〔アラブ人〕の小声の吹きは,彼らの頭上で交錯する会話に対して,いわば絶え間ない低音部を形造っていた」⁽¹³²⁾音感の鋭さは,静寂や沈黙の孕む豊かな内容に対する鋭さでもある。同じ場面でも,ムルソオの聴覚は「吹き,叫び,会話が交錯」するなかにひとつの「沈黙の小島」をくっきりと浮かび上⁽¹³³⁾らせる。自由を奪われた後も,護送車の中から「愛する街の,僕がときどき満足を感じずる時刻の,親しみぶかい物音を,ひとつひとつ,〔……〕聞きわけた。もうやわらいだ大気のなかの新聞売りの叫び,広場の公園のなかの最後の鳥たち,サンドウィッチ売りの呼び声,街の高台の曲り角での電車の嘆くような軋み,港の上に夜がゆれおちるまえのあの空のざわめき」⁽¹³⁴⁾を失われた「飲び」として聞きわける。また法廷では,「聞こえてくる街の音」から,「夕暮のやさしさ」⁽¹³⁵⁾が分った」と述べている。

視覚——前章の『マリーとムルソオ』の項において,いかにムルソオの眼差しがマリーという官能的乃至美的対象の鮮やかな描線と華やかな色彩を追って倦むことを知らないかを明らかにしておいた。快的な視覚印象をもたらす対象は人間に限られず,風景もまたそうである。「丘は黄色をおびた小石と真っ白なしゃぐま百合に蔽われて,向うの空はもう目が痛いほど青かった。〔……〕僕ら

は緑や白の柵のある小別荘が並ぶ間を歩いた。あるものはヴェランダごと御柳のかげに埋まり、あるものは石のなかで裸だった。台地の縁につくまえに、もう動かない海と向うのどっしりしたきれいな水のなかで眠っているような岬が見えた。⁽¹³⁶⁾ここに、サロートの言う「巨匠の豊かな色彩感覚」⁽¹³⁷⁾を認めないわけにはいくまい。また、囚人となり被告として法廷に立つムルソオは、外界から隔絶され視覚の楽しみを失ったのであるが、それでも法廷を出るとき「ほんの一瞬、夏の夕方の色〔……〕を味わ」⁽¹³⁸⁾うことを忘れないし、被告席で「ある種の夕空、マリーの衣服」⁽¹³⁹⁾を失われた「歓び」として思い出す。

b. 活 動

前項で明らかなようにムルソオはすべての感官によって生きることの「歓び」を堪能しているのであるが、この生きる「歓び」は筋肉の運動にはじまる身体の活動一般のうちにも見出される。「僕は走り出した。トラックは僕らを追いぬき、僕らはそれを追って、懸命に走った。僕は騒音と埃のなかに溺れた。もう何も見えず、疾走に伴うあの狂気じみた衝動しか感じなかった」⁽¹⁴⁰⁾、「水は冷たく泳ぐのは嬉しかった」⁽¹⁴¹⁾。身体の活動そのもののもつ悦びは「遊戯」⁽¹⁴²⁾のなかにも見出される。「マリーは二人で一緒に泳ごうといった。うしろにまわって腰をだきしめると、彼女は腕で水をかいて前進し、僕は足をばたばたさせて、それをたすけた」⁽¹⁴³⁾。

c. 性 愛

身体のもたらす「歓び」は性愛に極まる。ムルソオは「若いのだから、自然のことだ」⁽¹⁴⁴⁾が、官能的刺激に敏感に反応する。マリーは事務所に居た頃彼の「欲情の対象だった」⁽¹⁴⁵⁾、「浜で服をきると、マリーは輝く眼で僕をながめた。僕は彼女に接吻した。このときから、僕らはもう言葉を交わさなかった」⁽¹⁴⁶⁾、「彼女は僕の寝間着をきて、袖をまくりあげていた。彼女が笑ったとき、僕はまた欲情を覚えた」⁽¹⁴⁷⁾、「マリーと散歩に出ると街の「女たちは美しかった」⁽¹⁴⁸⁾、「僕らはちょっと平泳ぎをし、彼女はびったり僕に抱きついた。僕は彼女の両脚を僕の脚のまわりに感じ、彼女を欲しく思った」⁽¹⁴⁹⁾。

このような「欲情」の充たされるときは、すべての感官が開放され、あらゆる種類の快感覚が享樂されると同時に、他者の身体との「一致」⁽¹⁵⁰⁾、さらに自他の身体(内なる自然)の一致を介して、自然的世界全体との「一致」が感得されるときでもある。⁽¹⁵¹⁾「四時の太陽はあまり暑くなく、水はなま暖かくて、小さな波がながくゆったりとよせていた。マリーがひとつの遊戯をおしえてくれた。泳ぎながら、波の頂上を飲むようにして、口のなかに泡をいっぱい溜めておき、それから、仰向けになって、泡を空にむかって吹きあげる。すると、泡立つレースのように空中に消えて行ったり、なま暖かい雨になって、顔にかかってきたりする。だがしばらくすると、口のなか塩の苦味でやけるようになった。そのときマリーが追いついて、水のなかで僕に身体をぴったりつけてきた。彼女は唇を僕のそれにあてた。彼女の舌は僕の唇をさわやかにした。しばらくの間僕らは波のなかを転げまわった。〔……〕僕は窓をあけはなしにしておいた。夏の夜が僕らの日焼けした身体の上を流れるのは快かった。⁽¹⁵²⁾「水は冷たく、泳ぐのが嬉しかった。マリーと一緒に遠くはなれると、僕らは二人の動作と満足感がじっくり一致するのを感じた。沖で、僕らは浮身をした。空にむけた僕の顔の上で口にながれこむ水のヴェールを、太陽がすぐ乾かしてくれた。〔……〕小さな水しぶきの音が朝の海のなかで僕らを追いかけてきて、〔……〕〔マリーは〕海水でべっとりした身体で、髪をうしろにやっていた。僕の脇腹に脇腹をつけて横になったので、彼女の身体と太陽と二つの熱気で、僕は少し眠った。⁽¹⁵³⁾」

d. 睡眠

前項の最後の例が明瞭に示しているように、性愛を動とすると、その反対の極の静に位置する眠りもまた全身的且つ全体的な快の体験である。ムルソオの入眠は全感官の開放とそれがもたらす快感の享受とともに起こることが多い。というのも、「眠っている時、わたし達は決して感覚を遮断しているのではなく、むしろ世界と親和的な関係に入っている」⁽¹⁵⁴⁾からである。

世界との快美な統合体験の一形態としての睡眠を示す他の例を以下に示す。「部屋には午後の終りの美しい光が溢れていた。二匹の雀蜂がガラス屋根にぶ

つかってうなっていた。そして僕は眠くなってきた⁽¹⁵⁵⁾、「気持のよい晩だった。コーヒーで身体が暖まり、開けた戸口から夜と花の匂いがはいつてきた。僕は少しうとうとしたようだった⁽¹⁵⁶⁾」、「いい気持だった。ふざけるふりをして、僕は頭をうしろへそらすと、それを女の腹にのせた。何も言わなかったので、そのままでした。空がすっかり眼にはいつて、青く金色に輝いた。首筋の下で、マリーの腹がやわらかに波うつのが感じられた。僕らはながいこと、半ば眠りながら、^{アイ}浮標の上⁽¹⁵⁷⁾にいた。」

e. 世界

性愛や睡眠に認められるような感官の全体的開放は、内と外の自然の「一致」という体験をもたらすが、それはそのまま人間と自然を含んだ意味での世界⁽¹⁵⁸⁾に向けて「自分を開く⁽¹⁵⁸⁾」ことにつながっていく。これは先の性愛や睡眠の項に引いた例に照しても明らかである。だが、そのような生活の一局面のみならず、ムルソオの日常生活の全体が、人生のあたえる最も基本的な快の体験の享受と世界に「自分を開く⁽¹⁵⁸⁾」ことに向けて自ずから構成されているのである。

「今日は会社でよく働いた。〔……〕僕は手を洗った。正午の、この時間が僕は大好きだ。夕方は、こんなに楽しくはない。回転式の手ふき布がさわるとすっかり湿っているから。〔……〕僕らは太陽に燃える港のなかの貨物船の群れをながめてしばらく時間を費やした。〔……〕僕は走り出した。〔……〕僕は騒音と埃のなかに溺れた。〔……〕トラックは埃と太陽につつまれて、海岸の不揃いな敷石の上を跳ねて行く。エマニュエルは息がとまるほど笑った。僕らは汗まみれになってセレストの店についた。〔……〕僕は大急ぎで食べ、コーヒーを飲んだ。それから家にかえって酒のみすぎたので少し眠った。眼がさめると煙草がほしかった。〔……〕午後はずっと働いた。事務所はひどく暑くて、夕方、表へ出て海岸にそってゆっくり歩いて帰るのはたのしかった。空は緑色で、僕は満足していた。〔……〕真っ暗な階段をのぼると、同じ階の隣人、サラマノ老人にぶつかった。〔……〕僕は《今晚は》と言った〔……〕そこで僕は犬が何をしたのかとたずねた。〔……〕僕は声を高くした。』⁽¹⁵⁹⁾

確かにこれはムルソオの言うように、「もっとも貧弱」ではあるかもしれないが、また「もっとも長続きする喜びを見出してきた生活」⁽¹⁶⁰⁾の一日の記録である。ここには狭義の性愛の喜びこそ見出すことはできないが、これまで記述してきた視覚・聴覚・触覚・味覚の喜びが見出され、睡眠の、そして活動の喜びが見出される。活動の一つの形態としての労働もまたムルソオにとっては快樂であるか、少なくともそれを準備するものであるようだ。そして注目すべきことは、彼がこのような自分の生活全体に対して「満足」を表明するときは、また他者に対して心を開いてもいるということである。彼は「口数の少ない、内向的な性格」と評されて⁽¹⁶¹⁾おり、事実彼が他の者に挨拶の言葉をかける姿は物語の始終を通じてこの場面以外には見掛けられず、それを可能にした状況全体のもつ意味は大きいと言わなければならない。

もちろんこのような生の喜びへの開かれた世界への志向は、環界がムルソオにとって敵対的と意識される場合には微妙に妨げられる。

「またミルク・コーヒーをのんだが、とてもうまかった。外に出ると、すっかり日が昇っていた。マランゴと海をへだてる丘陵の上の空は一面に赤かった。丘の上を越える風は塩の匂いをここまで運んできた。〔……〕ながいこと僕は田舎へ行ったことがなかったので、ママのことさえなかったら、どんな楽しい散歩ができるだろうという気がした。しかし僕は中庭の、すずかけの木の下で待った。さわやかな土の匂いを吸いこみ、もう睡気を感じなかった。僕は会社の同僚達のことを考えた。この時間に、彼らは出勤のために床をはなれる。僕にはそれがいつも一番骨の折れる時刻だった。〔……〕建物のなかで鳴っている鐘に気をとられてしまった。窓のうしろが引越しのように騒がしかったが、やがてひっそりした。太陽がもう少し空に昇って、僕の足を温めはじめた。」⁽¹⁶²⁾

この短い一節においても、生きることそれ自体のもつ喜びが、文字通り五感のすべてを通じて堪能されている。そして眠りの快感をも含む生の喜びは、さらに活動(「散歩」)へ、他者(「同僚達」)との親和的世界の形成へと展開していかうとする。だが今はそれを「ママのこと」が妨げている。「ママ」自身がで

はなく、「ママのこと」即ち葬式が、葬式という儀式的帳から視く敵対的世界の監視の眼差しがムルソオの開かれゆく心を閉ざさせてしまうのである。

f. 価 値

感覚から活動、性愛、睡眠、世界との親和的關係の形成にまで至る「生活」に対して、ムルソオ自身はどのような評価を下すのだろうか。おそらく時と所を選ばず、またどのように「つまらない、些事⁽¹⁶³⁾」と一般にみなされているような事柄においても、「歎び」が見出されうること、しかも心と身体を以て「満足」が表明されるであろうことは想像に難くない。「またコーヒーをのんだが、とてもよかった」というような言葉を、ただ快感覚の確認だとのみ受けとってはならず、表現の単純さは心と身体を端的に充たす満足⁽¹⁶⁴⁾の故なのだということを読みとらなければならないだろう。

ムルソオの満ち足りた心が表われている箇所を幾つか挙げてみよう。「夕方、表へ出て海岸にそってゆっくり歩いて帰るのは楽しかった (heureux)。空は緑色で、僕は満足していた (content)」、「彼〔レエモン〕は大変僕に親切だった。これは楽しいひとときだ (bon moment)、と僕は思った⁽¹⁶⁴⁾」、「水は冷たく、泳ぐのが嬉しかった (content)」、マリーとの「二人の動作と満足感 (contentement) がじっくり一致するのを感じた」、「どう考えても、僕は不幸ではなかった (pas malheureux)⁽¹⁶⁵⁾。生活が全体として回顧されるときも、「幸福」と「満足」と「愛」が語られる。「自分が幸福 (heureux) であった浜辺の類のない静寂⁽¹⁶⁶⁾」と、「愛する (que j'aimais) 街の、僕がときどき満足 (content) を感ずる時刻の、親しみぶかい物音」とムルソオは言うのである。

感覚、活動、性愛、睡眠、世界との親和的交感そして生活全体への肯定的評価、これらの要素のすべてが統合され、生が現在における全体的体験であり、且つまた過去から未来へと開けゆく全体としても体験されるという、生の全体的体験の可能性を物語終局の「解放」されたムルソオの境地に窺うことができる。

「力が尽きたので、寢床に身体をなげだした。眠ったらしい。眼がさめると星

が顔の上にあったから。田舎のざわめきが僕のところまで登ってきた。夜と、土と埃の匂いが、僕のこめかみを爽やかにした。この眠りにおちた夏のすばらしい静寂が潮のように僕の内部に流れこんだ。このとき、夜の果でいくつかのサイレンが吼えた。それらは今では僕と永遠に関係を断たれた世界への出発を告げていた。まったく久しぶりで僕はママのことを考えた。[……] 僕もまたすべてを生きなおす気持になっているのを感じる。[……] 僕は初めて世界のやさしい無関心に、自分を開いた。世界を自分と非常によく似た、いわば兄弟のようなものと悟ると、僕は、自分が幸福であったし、今でもそうだと感じた。⁽¹⁶⁷⁾

ここには味覚を除く他のすべての感覚が喚起する快感覚と、活動及び睡眠の快の体験が語られている。人間の世界との親和的關係は、「永遠に関係を断たれた」と言われているが、少なくとも人間的世界の戸口としての母との「一致」は語られているのであり、また人間の世界を包みこむはるかに大きな「世界」にムルソオは「自分を開いた」のである。この「世界」は、後に詳述する故今は指摘するに止めるが、「兄弟のようなもの」と譬えられているところにも表われているように、極めて宇宙人間視的な世界であり、ムルソオとこの「世界」との結びつきに少なくとも広義の性愛の表現を読みとることは難しくない。そして最後に、過去・現在・未来の一切を通して生きることの「幸福」が確認され、生の世界の「すべて」が肯定され意欲されていることを指摘しておかなければならない。

B. 生否定的自然

生のもたらすあらゆる快感覚を豊かに味わいうる能力というものは、感覚刺激を微妙に感じ分ける鋭敏で繊細な感受性を前提としている。この感受性は、ある種の体質や気質の持主にあっては、不快な刺激に対する過敏な感受性としても同じ程度に働くことであろう。自ら「肉体的要求のためにしばしば感情をみだされる性質である」と言うムルソオは、このような体質や気質の持主であると思われる。

a. 感 覚

味覚——口唇領域における不快感の訴えは二箇所⁽¹⁶⁸⁾に認められるにすぎず、いずれも煙草に係わるものである。「煙草は苦い味がした」⁽¹⁶⁸⁾、獄中で煙草のかわりに「木片をしゃぶった。一日中たえまない嘔気につきまとわれた。」⁽¹⁶⁹⁾ 口唇領域の不快感の訴えの少なさは、味覚が他の感覚に比して格段の順応性を備えていることと、刺激を予め自らの好みに従って選択しうることに理由があるだろう。これに対して、例えば視覚は、特定の図を注視しうるところから主体の意のままになる感官のようにも思われるが、図を成り立たせる地も同時に見えてくるものであるし、瞼を閉じて明暗を感じとらないわけにはいかない。

ムルソオは食欲の不振を二度だけ訴えている。これはある心理的背景のもとに了解されうることであるが、今は指摘するに止めておく。

聴覚——ムルソオの耳は多様な不快刺激に反応する。養老院の老人達の話声は「まるでおうむの群れのけたたましいお喋りのようだった」⁽¹⁷¹⁾、通夜では「知らない女」の「小声で、規則正しく、決して泣き止むことはなさそうに思われた」泣き声に「もう聞きたくないのと思った」、「女の溜息と啜り泣きはだんだん間遠になった。彼女はさかんに鼻をならしていたが、そのうちやっと黙った」⁽¹⁷²⁾、同じく通夜で「老人たちの幾人かが頬の内側を吸ってこの奇妙な舌打ちに似た音をもらす」⁽¹⁷³⁾ ことに気付き、刑務所の接見所では「僕はすこし気持ちが悪くなって、出て行きたいと思った。騒音がやりきれなかった」⁽¹⁷⁴⁾、予審期間中の独房では「日が暮れかけて、僕の口にしたくない時刻だった。夕方のざわめきが、牢獄の各階から沈黙の行列になって昇ってくる、名のない時刻であった。〔……〕数ヶ月ぶりではじめて、僕は自分の声音をはっきりと聞いた」⁽¹⁷⁵⁾、刑の執行を控えた独房の中で「僕の耳がこれほど多くの物音に気づき、これほどかすかな響きをききわけたことはかつてなかった。〔……〕ごくかすかな軋みにも戸口へとんでゆき、扉の板に耳をおしつけて、夢中で待ちうけ、しまいには自分の呼吸が聞えて、それがぜいぜい、犬の喘ぎに似てくるのに恐怖を抱いたりした。」⁽¹⁷⁶⁾

逆に人々の沈黙が不快な印象をあたえる場合もある。通夜の老人達の「沈黙

が僕には苦痛であった⁽¹⁷⁷⁾、法廷の「広間全体から何かが湧きあがるように感じられ、僕は初めて、自分が罪人であることを理解した⁽¹⁷⁸⁾」、「彼女〔マリー〕が陳述を終ったとき、廷内を完全に沈黙が支配した⁽¹⁷⁹⁾」、そして判決直前の法廷の「広間を支配する沈黙。」⁽¹⁸⁰⁾

視覚——視覚上の不快感がムルソオによって訴えられる頻度は他の感官のそれと比べると比較にならないくらい高い。このことは先ず、ムルソオがよく見る人であり、どちらかと言えば世界を視覚中心に構成する視覚型の人間であることを示している。次いで、心身の疲弊や衰弱が視覚領域の苦痛な感覚としてまず現われることが多いので、豊饒な生の歓びの感受能力と一見矛盾するようではあるが、ムルソオの肉体がある種の脆弱さを潜めていることを窺わせるものであり、さらには、ムルソオが世界に対し防衛的に身構え、その心が「閉じられて」いる場合も多いことを示している。というのも、視覚は外界からの危険に対処するに至便な感官であるからだ。これは文体上確認できることであり、ムルソオが他者に視線を向けたり、結局同じことだが、他者の視線に気付いたり、他者の視線の行方を追ったりすることを表わす言葉、とりわけて「(じっと) 視る」(regarder) という動詞が頻繁に用いられており、それも養老院の場面〔第Ⅰ部第Ⅰ章〕、浜辺でのアラブ人との遭遇と格闘の場面〔Ⅰ—Ⅴ〕、公判の場面〔Ⅱ—Ⅲ〕、刑務所付司祭との会見の場合〔Ⅱ—Ⅴ〕において集中的に用いられている。いずれもムルソオが身構え自己防衛的にならざるをえない場面である。⁽¹⁸¹⁾

視覚が捉える不快刺激は、苦痛な感覚印象としても、また不快な視覚映像としても表われる。生肯定的自然にあって「美しい光⁽¹⁸²⁾」と表象されたのと同じものが、今やムルソオを責め苛むものとなる。霊安室で「門番がスイッチをひねると、光がとつぜん撥ねかえてきて、眼がくらんだ⁽¹⁸³⁾」、「白い壁の上の、光のきらめきは僕を疲れさせた。」⁽¹⁸⁴⁾そこへ母の老友達が入ってくる「ものの擦れ合う音で目が覚めた。眼をつぶっていたせいで、部屋はまぶしさを増したように思われた。僕の前に、影はひとつもなく、どの物体も、角も、^{かど}すべての曲線も、眼を傷つける明確さで描きだされていた。ママの友人たちがはいてきたの

は、このときだった。みなで十人ばかり、黙ってこの眼がくらむ光のなかに滑りこんできた。彼らはどの椅子もきしませず、腰をおろした。僕は今までこんなに人を見たことがないほど、注視して、彼らの顔と衣服の細かな点を、何ひとつ見逃さなかった。それなのに、何も音がきこえないので、彼らの現実性を信じにくかった。女たちはほとんどみな前掛をしていて、胴をしめつける紐が、とび出た腹をいっそう目だたせていた。老婆がどれほど太鼓腹になれるものか、僕はまだかつて注意したことがなかった。男たちはほとんどみなひどく痩せて、杖を持っていた。彼らの顔で打たれたのは、眼を見られないことであつた。そこには、ただ皺の巣の真ん中に、鈍い光があるだけだつた。彼らはすわると、大部分が僕の顔を見ながら、歯のない口にすっかり食われた唇をして、ぎごちなく首をふっていた。それが挨拶なのかそれとも筋肉のけいれんなのか、僕にはわからなかった。どっちかという挨拶したのだと思う。そのとき、僕は彼らがみな僕のまむかひに、門番をかこんで坐り、うなずいているのに気づいた。彼らがそこにいるのは、僕を裁くためだという、滑稽な印象を、僕は一瞬持った。⁽¹⁸⁵⁾「何も音が聞こえない」と言われているように、視覚が圧倒的な支配を揮っている場面である。しかも「眼がくらむ光」のもとに、禍々しい映像が「眼を傷つける明確さ」をもってムルソオの視野のすべてを占める。人々が自分を「裁く」ためにそこに居るのだという彼の「印象」が端的に示しているように、ムルソオの自己防衛的な姿勢は歴然としている。

葬行の途次、「今日は、溢れる太陽が風景を戦慄させ、非人間的な、気を減入らすものにしていた」、⁽¹⁸⁶⁾「周囲はあいかわらず太陽にあふれた、眩しい野原だつた。空の輝きは眼をむけられなかった。」⁽¹⁸⁷⁾

犯行当日の朝、「街に出ると、疲れていたのと、鑑戸をあげなかったせいで、もう太陽の照りつける外光が、まるで平手で頬を叩くように僕を打った。」⁽¹⁸⁸⁾ 真昼の砂浜で、「日光はほとんど垂直に砂の上におち、その海の上の反射は目をあけていられぬほどだつた。」⁽¹⁸⁹⁾ アラブ人達との格闘の寸前、「焼けつく砂は、今、僕に赤く思われた。」⁽¹⁹⁰⁾ アラブ人達との二度目の衝突に際しては、「太陽はいま

やすべてを押し潰しそうだった。それは砂の上、また海の上でこなごなに砕け
 ていた。⁽¹⁹¹⁾ ムルソオが独り浜辺に引き返すのは、「空から降ってくる眼のくら
 むような光の雨の下で身動きせずにいる」のは「苦痛だった」⁽¹⁹²⁾からでもある。
 砂浜に出ると、「同じ真っ赤なきらめきだった」、⁽¹⁹³⁾「砂から、漂白された貝殻か
 ら、ガラスの破片から、光の刃がきらめくたびに、僕の顔はひきつった」、⁽¹⁹⁴⁾「遠
 くに、小さな黒い岩の塊が、日光と海のしぶきの目もくらむような暈にかこま
 れているのが見えた。」岩陰にアラブ人を見つけたが、「太陽に慄える長い砂
 浜が僕の背後をふさいでいた」⁽¹⁹⁴⁾ので引き返せなかった。アラブ人が短刀を抜く
 と、「光が鋼鉄の上にほとぼしりきらめく長い刃のように、僕の額にとどいた」、
 この「短刀からふきだす光った剣」、⁽¹⁹⁵⁾「燃える剣は僕の睫毛を咬み、痛む眼をか
 きまわした」、そして「すべてがゆらめいたのは、そのときだった。」

このように、ムルソオが殺人を犯すに至る一日の過程を朝の目覚めから辿っ
 てみると、「剣」に譬えるところに象徴的に現われているように、攻撃者あるいは
 迫害者としての光の表象が頻出していることに気付かざるをえない。攻撃的
 な光のイメージはここ〔第Ⅰ部第Ⅶ章〕以外にも見出せるけれども、これほど
 集中的に使われてはいない。この責め苛む者としての光の表象は、ムルソオが
 寝起きに覚えた「疲れ」に因るとも言えようが、それだけのこととも思われな
 い。砂浜に反射する光が「赤」く、「真っ赤」に知覚されていることにも窺える
 ように、禍々しい「光の刃」に攻め立てられつつも、逆にまたそこに魅入られ
 ていくムルソオの心の暗渠の波立ちを読みとらなければならないだろう。ある
 意味ではムルソオの言うように犯行は「太陽のせい」であるとも言えるが、し
 かしそれは「日光をうけて半分眠っていたので何も考えなかった」⁽¹⁹⁶⁾からという
 ことでは決していない。

以上味覚、聴覚から視覚とみてきたが、快感覚を記述する場合と違って、感
 官個々に対応して不快感覚を記述していくことはなかなか難しい。それという
 のも、人間も生体として自ずから快を択り不快を避ける能力を本能として備え
 ているのであるが、この外的刺激を選別するフィルターの機能を低下させる身

体上の原因は個体によって様々であり、また或る心理状態、例えば抑鬱状態にあっては全ての感覚刺激が全体として不快に転ずるということもあるので、ひとつの不快感覚を記述するにもその背景をなす心身の状態を考慮に入れざるをえず、心身全体の不快反応の布置に照してみないとその了解が難しいということがあるからである。そこで残る嗅覚、触覚上の不快感覚については、個々に記述することは止めて、感官の全体によって知覚された不快の体験を記述しよう。

「空の輝きは眼をむけられなかった。〔……〕太陽がアスファルトを吹きださせていた。足がそのなかにめり込んで、ぎらぎらする中味をむきだしにした。車の上では、馭者の防水革の帽子がこの黒い泥のなかでこねられたように見えた。僕は青と白の空と、こねかえされたアスファルトの粘っこい黒、式服の褪めた黒、車のつやつやした黒などの単調な色彩との間で、少し正気を失ってきた。これらのすべて、太陽、車についた馬糞と皮の匂い、塗料と香の匂い、不眠の一夜の疲労などが、僕の視力と思想をみだした。〔……〕僕は、こめかみに血が脈打つ(197)のを感じた。」

この短い一節の中に聴覚を除く他のすべての感官が扱えた不快な感覚印象が凝集している。とりわけ視覚上のそれがここでも支配的である。環界のもたらず「これらすべて」の不快刺激がムルソオの「視力と思想をみだし」、「正気を失」わせるに至るのである。これは「不眠の一夜の疲労」だけで説明がつくとは思われない。犯行の直前に「それはママを埋葬した日と同じ太陽だった。そのときのように、ひどく頭が痛くなり、その皮膚の下ですべての血管が一緒に脈を打つ(198)」とムルソオが言っていることに照しても明らかなように、犯行当日の光の禍々しい表象を記述するにあたって示唆しておいたあの心の中の不気味な暗流をここにも認めざるをえない。世界が全体として不快に知覚されると相即的に、ムルソオの心の淵から定かならぬ不吉なものが「ゆらめ」き出てくるのである。それは「血」への衝迫であり、破壊への盲目的な衝動であろう。そう考えると、上の一節に続く所で、気絶するペレが「まるで壊れた操り人形

のようだ」と表象され、記憶に留められた印象として「墓地のいくつかの墓〔白〕の上の赤いゼラニウム」や「ママの棺の上に転がった血の色をした土、そこに混ったいくつかの根の白い肉」が挙げられているのも頷けることである。⁽¹⁹⁹⁾ いずれも人体の解体や破壊を連想させるイメージである。

アラブ人達との二度にわたる対決の場面を今度は視覚印象に限定しないで辿り直してみよう。まず最初の格闘の場面、「焼けつく砂は、今、僕に赤く思われた。〔……〕相手〔アラブ人〕は水の中にうつぶせに伸びてしまい、顔を底にぶつけた。〔……〕このあいだにレエモンもまた擲り、相手の顔は血まみれになった。〔……〕しかしレエモンはもう腕を切られ、唇を裂かれていた。〔……〕僕らは太陽の下で釘づけにされ、レエモンは血の滴る腕をかたく握っていた。〔……〕彼が喋るたびに、傷から血が口の中で泡を立てた。⁽²⁰⁰⁾ 次いで二度目の対決の場面、「太陽はいまやすべてを押し潰しそうだった。〔……〕しばらくの間は、太陽とこの沈黙が、泉の響きと三つの音を伴っているきりだった。〔……〕また笛とかすかな水音が沈黙と暑さのなかできこえた。〔……〕相手は笛を吹きながら、二人でレエモンの動作をひとつひとつ見張っていた。〔……〕レエモンが僕にピストルをわたすとき、太陽が銃身にきらめいた。それでも、僕らはあたりのすべてが殻を閉じてしまったかのように、まだ身動きをしなかった。僕らは眼を伏せずに睨みあったが、ここですべては海、砂、太陽、笛と泉の二重の沈黙の間で停止していた。僕は、この瞬間撃つことも撃たないこともできる。どっちでも同じことだと思った。⁽²⁰¹⁾」

流血の格闘を予感して砂が「赤」く見えたように、ムルソオはアラブ人やレエモンの流す「血」を見、匂いを嗅ぎ、レエモンの「口の中で泡を立て」ている血潮の味を己が喉中に味わったことであろう。それ故彼がレエモンに「⁽²⁰²⁾行って」第二の対決の場に臨むのは、ただレエモンの身を案じる心からだけではあるまい。太陽の目も眩む光と暑熱が誘引となって、またしても彼は「正気を失って」、「血」に惹き入れられていくのである。再度の対決の場面では、嗅覚を除く他のすべての感官が張り詰めて、危険で不快な刺激の襲来を見張っ

ている。すべての感覚印象は切迫する危機の不吉な兆しとなる。それは単に再びの流血への予感にのみよるのではない。ムルソオの心の暗部から「血」への渴きが浮上してくるからこそ、一層世界は死の脅威のもとに緊迫の度を増して見えるのである。生肯定的自然下の世界は解放・調和的律動・親和性を原理として表象されていたが、この生否定的自然下の世界は、逆に「殻を閉じ」、人間も自然もすべてがその動きを「停止」し、敵対し「睨みあっ」ているのである。世界がすべての点で生に敵対し、生を否むとみえるこの「瞬間」、「撃つこと」は許されるとムルソオは思うのである。

生肯定的自然下における「解放」されたムルソオの場面とまったく対照的な位置にあるものは、生否定的自然下における殺人の場面である。「太陽の灼熱が頬につたわり、汗の滴が眉毛にたまるのを感じた。それはママを埋葬した日と同じ太陽だった。そのときのように、ひどく頭が痛くなり、その皮膚の下ですべての血管が一緒に脈を打った。灼くような痛みに堪えかねて、僕はちょっと前にでた。〔……〕光が鋼鉄の上にほとぼしりきらめく長い刃のように、僕の額にとどいた。その瞬間、眉毛のなかに溜った汗が一遍に顔の上に流れて、それをなまぬるく厚いヴェールで蔽った。涙と塩のカーテンで眼が見えなくなった。もう太陽のシンバルを額に感じ、短刀からふきだす光った剣を眼前にぼんやり感じるだけだった。この燃える剣は僕の睫毛を咬み、痛む眼をかきまわした。すべてがゆらめいたのは、そのときだった。海は濃く熱い息吹をもたらした。空は真二つに裂けて火の雨を降らすと思われた。僕は全存在を緊張させ、手をピストルの上にひきつらせた。引金は言うことをきき、僕は銃尾のなめらかな腹にさわった。そこで、短い耳を聳する音のなかで、すべてがはじまった。〔……〕そこで僕は身動きしない身体になお四発うった。弾丸は、跡を見せずに、⁽²⁰³⁾食い込んだ。あたかも不幸の扉を叩く四つの短い音のように。』

視覚と聴覚と触覚がもたらす夥しい不快感は遂に完全にムルソオの「正気を失」わせるに至る。世界は今や「殻」すらも取り払って、その兇暴な相貌を顕わにし、ムルソオを圧殺しようとしているかのようである。「すべてがゆらめい

た」、即ち生肯定的世界においてムルソオの生を高揚させていた一切のものが、秩序(コスモス)を失って、破壊と死の混沌(カオス)のうちに崩れ落ちていく。「海は濃く熱い息吹をもたらし」、「空は真二つに裂けて火の雨を降らすと思われた」のである。先程の第二の対決の場面において、世界との対立が一切の動きの「停止」にその極みをみたのに比し、ここでは最後の垣も越えられ、人間(アラブ人)も自然(太陽と海)も、世界の全体が自己に襲いかかってくると表象されているのである。このような文脈からして、生肯定的自然のもとで身体の律動と自然の律動との調和に世界との一致を体感したのとはまったく逆に、ムルソオが「全存在を緊張させ、手をピストルの上にひきつらせた」のも当然のことと言える。

さらに、「銃尾のなめらかな腹」という表現からも窺えるように、この殺伐とした場面にも、「解放」されたムルソオの場面と同様、性愛の影が色濃く差していることを見てとることは易しいと思われる。この点は後に詳述することとし、ここではただ次のことを指摘しておくにとどめよう。生の本能(エロス)は四つの要素によって構成されている。即ち、性の衝動、攻撃性、情愛性、自己愛的自己保存の衝動の四要素が統合されたものがエロスと呼ばれるのである。性愛(狭義のエロス)とは、性の衝動を中心として見たこの四位一体のことに他ならない。なんらかの理由によってこの四要素のひとつが衰退したり過剰になったりすると全体の統合が崩れる。性愛においてもし情愛性が後退すると、攻撃性が直接的に性の衝動と癒着し、性愛はサディズムやマゾヒズムへと偏向していく。ムルソオの殺人行為にみとられる性愛性とはまさにこのような場合であって、生肯定的自然下における性愛とはまったく逆に、究極において死を志向するものである。

〔付記〕

『異邦人』を含むカミュの著作からの引用箇所¹⁾の訳出にあたっては、新潮世界文学48『カミュⅠ』・同49『カミュⅡ』の訳文をほぼ踏襲し、新潮文庫版『異邦人』窪田啓作訳を随時参照した。

〔注〕

- (1) Albert Camus: *Le Mythe de Sisyphe*, Gallimard, 1942, p. 173. 以下『神話』と略記。
- (2)―(3) 同書, p. 74.
- (4) 同書, p. 33.
- (5) H. テレンバッハ『メランコリー』, 木村敏訳, みすず書房, p. 90.
- (6) 同書, p. 57.
- (7) 同書, p. 53.
- (8) 木村敏『自覚の精神病理』, 紀伊國屋書店, pp. 163-164.
- (9) テレンバッハ, 前掲書, p. 98.
- (10) 同書, p. 55.
- (11) 木村, 前掲書, p. 166.
- (12) 島崎敏樹『人格の病』, みすず書房, p. 76.
- (13) Alain Robbe-Grillet: *Nature, humanisme, tragédie*, in *Les critiques de notre temps et Camus*, Garnier, 1970, p. 66. なお「宇宙人間視作用」という訳語は古田幸男訳, エドガール・モラン『人間と死』, 法政大学出版局, p. 96 のそれに従っている。
- (14) Albert Camus, *L'Etranger*, Gallimard, 1942, p. 94.
- (15) 木村, 前掲書, p. 166.
- (16) A. Robbe-Grillet: *Ibid.*, pp. 65-66.
- (17) 『異邦人』, p. 144.
- (18) *Ibid.*, p. 171.
- (19) N. O. ブラウン『エロスとタナトス』, 秋山さと子訳, 竹内書店新社, p. 95.
- (20) 『異邦人』, p. 109.
- (21) *Ibid.*, p. 171.
- (22) *Ibid.*, p. 161.
- (23) S. フロイト『自伝的に記述されたパラノイア(妄想性痴呆)の一症例に関する精神分析的考察』, 小此木啓吾訳, 改訂版フロイド選集第16巻収録, 日本教文社, p. 118.
- (24) 同書。
- (25) 同書, pp. 117-118.
- (26) 同書, p. 117.
- (27) 『異邦人』, p. 169.
- (28) *Ibid.*, p. 172.
- (29) *Ibid.*, p. 169.
- (30) *Ibid.*, p. 146.
- (31) B. パンゴー『カミュの「異邦人」』, 花輪光訳, 審美社, p. 59.
- (32) 『異邦人』, p. 127.
- (33) *Ibid.*, p. 29.
- (34) *Ibid.*, p. 130.
- (35) *Ibid.*, p. 20.
- (36) パンゴー, 前掲書, p. 61.
- (37) 同書, p. 59.
- (38) 『神話』, p. 116.
- (39) 『異邦人』, p. 138.
- (40) *Ibid.*, p. 113.
- (41) *Ibid.*, p. 113.
- (42) *Ibid.*, p. 112.
- (43) *Ibid.*, p. 148.
- (44) *Ibid.*, pp. 145-146.
- (45) *Ibid.*, p. 134.
- (46) *Ibid.*, p. 146.
- (47) 語り手は, 「僕は不意打ちを食うのを, いつも好まなかった。なにかが僕の身におこるとき, その用意をしていたかっ

- た) (『異邦人』, pp. 158-159) と言っているが、これは人間の生にとっては意識がすべてであると言っているのと同じことである。この意識至上主義は語り手のものであると同時に作者カミュ自身のものでもあると思わざるをえない。というのも、意識がいかに身構えても避けることのできない「不意打ち」をもたらすものが唯ひとつあり、それは自己の背面から襲う無意識であると知っている作者は、語り手の精神から無意識の過程を予め排除しておくことによって禍根を断っておこうとした形跡が認められるからである。即ち、草稿の段階においては、囚人ムルソオの「夢」も言及されていたし、殺人行為の瞬間にムルソオの全身を充たした「悦び」も書かれていたのであるが (Albert Camus: Théâtre, Récits, Nouvelles, Bibliothèque de la Pléiade, 1962, p. 1924 [p. 1168 への注]; p. 1925 [p. 1182 への注], 以下『創作集』と略記。), 決定稿においては、ムルソオの無意識への戸口を塞ぐべく、意図的にこれらは削除されたのである。『神話』の「いっさいは意識から始まり、意識の力によらなければ、なにものも価値をもたない」(p. 27) という主張は、このような推定を裏付けるものである。
- (48) 『異邦人』, pp. 25-26, 40, 61, 70 [encore], 78, 152, 168. の七箇所 で用いられている。
- (49) *Ibid.*, p. 94.
- (50) *Ibid.*, p. 96.
- (51) *Ibid.*, pp. 97-98.
- (52) *Ibid.*, p. 99.
- (53) *Ibid.*, p. 97.
- (54) *Ibid.*, p. 98.
- (55) *Ibid.*, p. 138.
- (56) *Ibid.*, p. 71.
- (57) *Ibid.*, pp. 158-159.
- (58) *Ibid.*, p. 135.
- (59) *Ibid.*, p. 131.
- (60) *Ibid.*, p. 158.
- (61) *Ibid.*, p. 160.
- (62) *Ibid.*, p. 163.
- (63) *Ibid.*, p. 63.
- (64) *Ibid.*, p. 164.
- (65) *Ibid.*, p. 170.
- (66)-(67) *Ibid.*, p. 169.
- (68) *Ibid.*, p. 170.
- (69) *Ibid.*, p. 142.
- (70)-(71) *Ibid.*, p. 140.
- (72)-(74) *Ibid.*, p. 141.
- (75) S. フロイト『精神分析学概説』, 小此木啓吾訳, 改訂版フロイト選集第15巻収録, 日本教文社, pp. 350-351. 以下『概説』と略記する。
- (76) 同書, pp. 355-357.
- (77) 同書, pp. 352-353.
- (78) 同書, pp. 360-361.
- (79) 『異邦人』, p. 100.
- (80) *Ibid.*, p. 143.
- (81) *Ibid.*, p. 168.
- (82) *Ibid.*, p. 98.
- (83) *Ibid.*, p. 99.
- (84) *Ibid.*, p. 140.
- (85) *Ibid.*, p. 141.
- (86) *Ibid.*, p. 142.

- (87) フロイト『概説』, p. 360. (104) *Ibid.*, p. 38.
- (88) 『異邦人』, p. 163. (105) *Ibid.*, p. 45.
- (89) *Ibid.*, p. 169. (106) *Ibid.*, p. 42.
- (90) *Ibid.*, p. 143. (107) *Ibid.*, p. 55.
- (91) *Ibid.*, p. 147. (108) *Ibid.*, p. 78.
- (92) *Ibid.*, p. 150. (109) *Ibid.*, p. 137.
- (93) Henri-Charles Puech: En quête de (110) *Ibid.*, p. 148.
 la Gnose I, Gallimard, 1978, p. 195. (111) *Ibid.*, pp. 20, 42, 78.
 「彼〔グノーシス主義者〕の爾余の一切の (112) *Ibid.*, p. 58.
 振舞はこの初発の感情 (sentiment ini- (113) *Ibid.*, pp. 42, 48, 50, 78.
 tial) に発し, それに続べられていると (114) *Ibid.*, p. 36.
 思われた。」 従ってこの「初発の感情」 (115) *Ibid.*, pp. 34, 36, 38, 42, 48-49, 78,
 とは, ひとつの理論大系, 行動様式全体 82, 111.
 の要であり, 原点をなすような特殊な感 (116) *Ibid.*, p. 111.
 情の在り方を指している。拙論ではこの (117) *Ibid.*, p. 42.
 意味を保ちつつ, 精神分析学に言う幼少 (118) *Ibid.*, p. 48.
 年期における精神的外傷に対応する感情 (119) *Ibid.*, pp. 49-50.
 の様態を指すものとしてこの〈sentiment (120) *Ibid.*, p. 51.
 initial〉という語を用い, これが (121) *Ibid.*, p. 78.
 爾後の一切の発想や行動にある決まった (122) *Ibid.*, p. 54.
 形式を与えるものとする。Puechはこの (123) *Ibid.*, pp. 21-22.
 「初発の感情」を無意識の過程に位置さ (124) *Ibid.*, p. 34.
 せているわけではないので, これと区別 (125) *Ibid.*, p. 148.
 する意味で, 生硬な訳語であるが「始源 (126) *Ibid.*, pp. 54-55.
 の情念」と訳した。 (127) *Ibid.*, p. 76.
 (94-95) 『神話』, p. 85. (128) *Ibid.*, p. 77.
 (96) 同書, p. 87. (129) *Ibid.*, p. 109.
 (97) 『異邦人』, p. 42. (130) *Ibid.*, p. 29.
 (98) *Ibid.*, p. 57. (131) *Ibid.*, p. 108.
 (99) *Ibid.*, p. 77. (132) *Ibid.*, p. 106.
 (100) *Ibid.*, p. 17. (133) *Ibid.*, p. 108.
 (101) *Ibid.*, p. 21. (134) *Ibid.*, p. 137.
 (102) *Ibid.*, p. 77. (135) *Ibid.*, p. 149.
 (103) *Ibid.*, p. 34. (136) *Ibid.*, p. 74.

- (137) Nathalie Sarraute: *Le psychologique dans L'Etranger*, in *Les critiques de notre temps et Camus*, p. 58.
- (138) 『異邦人』, p. 137.
- (139) *Ibid.*, p. 148.
- (140) *Ibid.*, p. 41.
- (141) *Ibid.*, p. 76.
- (142) *Ibid.*, p. 54.
- (143) *Ibid.*, p. 76.
- (144) *Ibid.*, p. 110.
- (145) *Ibid.*, p. 32.
- (146) *Ibid.*, p. 54.
- (147) *Ibid.*, p. 55.
- (148) *Ibid.*, p. 65.
- (149) *Ibid.*, p. 77.
- (150) *Ibid.*, p. 76.
- (151) 「エロスの究極的目標」が「快樂の内に世界との統合を確認すること」であるという教説(ブラウン, 前掲書, p. 57.)は, 特異なものではない。最近の啓蒙的な性科学入門書においても同様の主旨のことが説かれている。「人間の性 (sexuality) とは, あらゆる感覚——触覚, 味覚, 視覚, 嗅覚, 聴覚——と, 感情および感覚が溶けあう最高の恍惚状態を伴うものである。」(J. マネー, P. タッカー『性の署名』, 人文書院, p. 160.) こうした主張が人間の真実の確認であるのか, それとも人間の己み難い幻想のひとつであるのか, 今は問わないでおく。
- (152) 『異邦人』, pp. 54-55.
- (153) *Ibid.*, pp. 76-77.
- (154) 森山公夫『躁うつ病論の解体から疾患単位論の解体へ』, 笠原嘉編『躁うつ病の精神病理 I』所収, 弘文堂, p. 167.
- (155) 『異邦人』, p. 15.
- (156) *Ibid.*, pp. 17-18.
- (157) *Ibid.*, p. 32.
- (158) *Ibid.*, p. 171.
- (159) *Ibid.*, pp. 40-44.
- (160) *Ibid.*, p. 148.
- (161) *Ibid.*, p. 96.
- (162) *Ibid.*, pp. 21-22.
- (163) *Ibid.*, p. 41.
- (164) *Ibid.*, p. 59.
- (165) *Ibid.*, p. 64.
- (166) *Ibid.*, p. 88.
- (167) *Ibid.*, pp. 171-172.
- (168) *Ibid.*, p. 71.
- (169) *Ibid.*, pp. 111-112.
- (170) 「僕は空腹を感じなかった。」*Ibid.*, pp. 16, 61.
- (171) *Ibid.*, p. 13.
- (172) *Ibid.*, pp. 19-20.
- (173) *Ibid.*, p. 20.
- (174) *Ibid.*, p. 108.
- (175) *Ibid.*, pp. 115-116.
- (176) *Ibid.*, p. 159.
- (177) *Ibid.*, p. 20.
- (178) *Ibid.*, p. 128.
- (179) *Ibid.*, p. 133.
- (180) *Ibid.*, p. 151.
- (181) 本文に示した条件のもとに使われている *regarder* (視る) とその名詞形 *regard* (視線) が認められる箇所は以下の通りである。前者を基本とし, 後者の場合は [] 内に示す。I〔部〕—

- I〔章〕, pp. 11, 14, 14, 18-19, 19, 20, 21, (187) *Ibid.*, pp. 27-28.
 23, 26, 26, 28〔regard〕; I—II, pp. (188) *Ibid.*, p. 72.
 36, 38; I—III, pp. 41, 43; I—IV, (189) *Ibid.*, pp. 78-79.
 pp. 59, 60-61, 61; I—V, pp. 65, 67, (190) *Ibid.*, p. 80.
 73, 73, 74, 77, 81, 83, 83, 83, 84, 87 (191) *Ibid.*, p. 82.
 〔regard〕, 87; II—I, pp. 92, 100; (192) *Ibid.*, p. 84.
 II—II, pp. 107, 107, 107-108, 108, 110, (193) *Ibid.*, p. 85.
 115; II—III, pp. 119, 119, 122, 122, (194) *Ibid.*, pp. 86-87.
 123, 124〔regard〕, 125, 126, 127, 127 (195) *Ibid.*, pp. 87-88.
 〔regard〕, 128, 128, 129, 130, 136; II (196) *Ibid.*, p. 79.
 —IV, pp. 149, 149〔regard〕, 149〔re- (197) *Ibid.*, pp. 28-29.
 gard〕, 151; II—V, pp. 163, 163, 164, (198) *Ibid.*, p. 87.
 165〔regard〕, 166, 166, 167, 170. (199) *Ibid.*, p. 29.
 (182) 『異邦人』, p. 15. (200) *Ibid.*, pp. 80-81.
 (183) *Ibid.*, p. 16. (201) *Ibid.*, pp. 82-84.
 (184) *Ibid.*, p. 17. (202) *Ibid.*, p. 82.
 (185) *Ibid.*, pp. 18-19. (203) *Ibid.*, pp. 86-88.
 (186) *Ibid.*, p. 26.